

小さな社会「学級」での集団活動を通して 社会を生き抜くための力を獲得する

文部科学省初等中等教育局視学官 杉田 洋ひろし

子どもは学校生活での大半の時間を学級で過ごすため、学級の風土は学校に対する意識や学習意欲に直結する。集団活動を通じた人間関係づくりなどに熱心に取り組む文部科学省初等中等教育局視学官の杉田洋氏が、好ましい学級のあり方や、学級づくりの方策を語る。

学級づくりの課題

学外での集団活動が減少し 育ちにくくなった社会性

長年、教育現場を見つめる中で、子ども同士が人間関係を結ぶことが難しくなってきたりするように感じています。その結果、学級づくりに苦慮する先生も増えているようです。

その背景の1つに、子どもの「巣ごもり化」が挙げられます。近所の学年が違う子どもが集まって遊ぶことは、社会性を育てる重要な場となりますが、今は大勢の子どもが屋外に集まって遊べる機会が減りました。友だちと一緒に遊ぶといっても、部屋の中で別々に

ゲームをして過ごす姿が見られます。

自己中心的な傾向の子どもの増加は、そうした環境変化と無関係ではありません。自分の言いたいことを言うだけで、相手の話は聞かない。そういう子どもたちが集まって、互いに高め合うような集団にはなりにくいものです。

保護者の意識にも変化が見られ、特に我が子しか見ようとしめない傾向が強まっています。昔の保護者には「若い先生を育ててやるう」という寛大な面がありました。今では1年目の教師にもベテラン教師と同じ能力を求め、小さな失敗も見逃しません。そうした状況で、保護者とのかわり方に悩む教師が

増えています。

また、教師自身も、幼少期からTVゲームに親しみ、望ましい集団活動を経験していない世代が増えています。豊かな経験に基づいて集団活動の指導が出来なくなっているのです。

もう1つ、社会全体の風潮として学力の捉え方の変化も、学級づくりと大きな関連があります。目に見える学力を重視する傾向が強まるあまり、学習指導に重点が置かれ、集団の中での人間関係づくりがおろそかになってしまっているのです。学力は本来、人間としての総合力といえます。学級集団を通して育つ「心」も学力の重要な構成要素です。そうした観点でも、学級づくりは重要なのです。

学びに向かう土台を築く学級づくり



すぎた・ひろし◎埼玉県浦和市小学校教諭、浦和市教育委員会、さいたま市教育委員会を経て、現職。文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官、国立教育政策研究所研究開発部教育課程研究センター教育課程調査官を兼任。主な著書に『よりよい人間関係を築く特別活動』（図書文化社）『自分を鍛え、集団を創る！特別活動の教育技術』（小学館）など。

学級集団はなぜ大切なのか

学級は多様性のある小さな社会 社会性や人間関係形成能力が育つ

次に学級集団が持つ意味を考えてみたいと思います。

社会的には、人間は集団の遍歴を通して形づくられるといわれています。生まれて初めて属する集団は家族であり、大人になれば社会の中で生きていくことが求められます。その間に位置する学校は、子どもが人間形成をする重要な場です。学校では大半の時間を学級で過ごしますから、そこでの集団体験は子どもの育ちに大きく影響します。学級は、育ちや価値観、能力、体力などが

異なる子どもが集まる、小さな社会です。学級での集団活動を通し、社会で必ず必要とされる社会性や人間関係形成能力を身に付けさせる指導が求められます。地域の異年齢集団が崩壊した今、学校や学級の役割はますます大切になっていくといえるでしょう。

子どもが支え合い、認め合う 「支持的な風土」のある学級を

それでは、理想の学級はどのような学級なのでしょう。抽象的ですが、全ての子どもが「幸せ」と感じることだと思います。大人も同じですが、人は「愛される」「褒められる」「役に立つ」「必要とされる」ことで幸せを感じるものだと思います。この4つに満ちた学

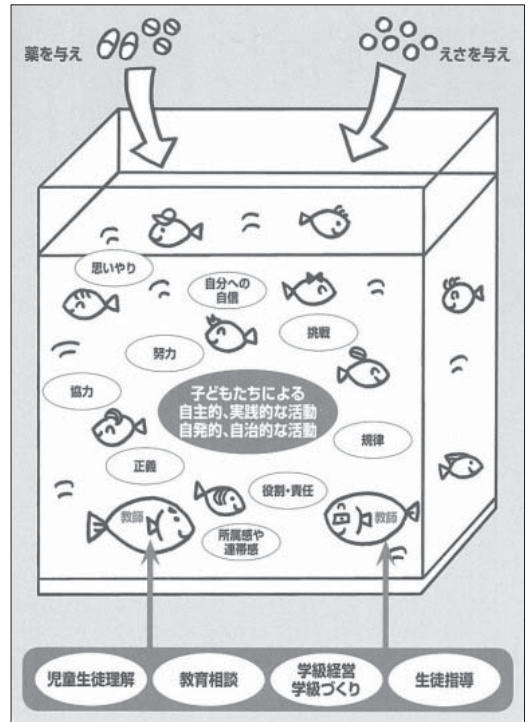
級にするためには、風土づくりに取り組む必要があります。

学級の風土を説明するために、学級を「水槽」、子どもを「魚」、生活や人間関係などからつくられる風土を「水」に例えてみましょう（P.8図）。魚が生き生きと泳ぎ回るためには、水をきれいに保つ必要があります。そのためには教師と一緒に水槽の中に入って学級づくりに努めると共に、子ども自身がよりよい水をつくるように、自主的で実践的な取り組みをするように導く必要があります。子どもは、その過程で我慢や努力、正義、規律、協力、思いやりなどを学び、体得するでしょう。逆に、水がよどんでいけば、息苦しくなり、気力を失い、いらいらして争いが起きるかもしれません。

学級において目指すべき風土は、一人ひとりが生かされ、支え合い、認め合う「支持的な風土」です。その反対は、互いに監視し合い、批判し合うような「防衛的な風土」です。

教師が子どもに競争ばかりさせると、防衛的な風土が強まります。例えば、読書量のグラフを教室に掲示して競争させると、それが子どもにとって先生から認められる物差しとなり、そこから外れた子どもは自信や意欲を失ってしまいます。ましてグループ対抗になれば、足を引っ張る子どもを邪魔と感じる危険性があります。競争はすぐに結果が出る方法の1つですが、人を育てる段階の学校教育

図 水槽に見立てた学級の様子



出典 / 杉田洋「よりよい人間関係を築く特別活動」(図書文化社、2009)

では注意して用いる必要があるでしょう。時間は掛かりますが、友だちの失敗を温かく受け止め、助言したり注意したりしながら一緒に成長していく集団の方が人間的といえます。

学級力を高める指導の工夫

教師と子ども、子ども同士の間
しっかりと糸をつむぐ

支持的な風土のある学級では、教師と子どもとの間の縦糸、また子どもと子どもとの間の横糸がしっかりとつながれています。

縦糸をつなぐためには、教師が子ども全員から「自分は大切にされている」と思われるような接し方が理想です。学級全体をひとつくりにせず、一人ひとりとどうかかわるのかを大切にしてください。子どもに思いを伝え

るためには、「ありがとう」「頑張れ」という言葉をあえて使わず、感謝や励ましの気持ちが伝わるようにするにはどんな言葉掛けが出来るかを考えてみるとよいと思います。

教師が出来ることは「受容」と「要求」です。受容ばかりで要求をしなければ優しいだけの先生です。教師には個性がありますので得意な方を大切にしつつ、バランスを意識してください。

発達段階を意識することも重要です。学年が上がるにつれて、子どもに任せる部分を増やしましょう。指導の基本は、教えて、褒めて、我慢することです。子どもが考えれば分かることまで教えていると、いつまでも自分で出来るようにはなりません。時間が掛かってても、子ども自身に気付かせたり言わせたりする方が価値があります。何かが出来ることは大きな喜びであり、それが友だちの励みによって出来たのであれば達成感もひと

しおです。学年が上がるほど、子どもに任せて我慢する、言い換えれば「待つ」ことの大切さを常に意識してください。

横糸をつなぐのは、縦糸をつなぐよりも難

しいでしょう。教師が直接糸をつなげる指導ではなく、子ども自身に糸をつなぎたいと思わせる指導からです。

有効な方法の1つは、子どもが協力して少し頑張れば到達できるような目標に向かわせることです。目標は、教師が一方的に与えるのではなく、子ども自身が取り組みたくなるように設定することがポイントです。例えば、子どもたちと共に学級目標を考えるようにすることは良い方法です。

目標設定は全てを子どもに任せるのではなく、学校の方針や保護者の願いを伝えたと上で担任としての思いを説明し、「あなたたちはどうしたい?」と聞きます。子どもたちの発言をまとめていき、結果的によくある目標に落ち着いたとしても、子どもの言葉で語らせることが重要なのです。例えば、子ども自身が「いじめをなくそう」と口にする方が、教師が言うよりも大きな抑止力となります。

学級目標の他にも、学校行事をはじめ、子どもが立ち上がりたくなる目標はいろいろ設定できます。その際、「目標」と「目的」を取り違えないことが重要です。「合唱大会で優勝する」のは目標にすぎず、「全員が参加して力を合わせる」ことが目的です。目標だけに目を向けていると、全員が幸せを感じられる集団にはなりません。集団活動は、少し取り違えるとマイナスに作用する両刃の剣であることを意識してください。

学びに向かう土台を築く学級づくり

教師としての資質を高めるには

子どもの言葉を謙虚に受け止め 常に人間性を磨く努力を

子どもとの人間的な交流が土台となる学級づくりでは、教師の人間的な資質が大いに求められます。子どもから「この先生に褒められたい」と思われるためには、常に自分自身を磨く努力も必要でしょう。厳しいかもしれませんが、何事も子どもを中心に考えることで、自分の至らなさが見え、それを謙虚に受け止める場面も出てくるかもしれません。

良い学級の授業では、子どもがよく語り、周囲はよく聞きます。そして、誰よりも子どもの話を聞いているのが教師です。

私自身、教師時代は、「聞く」「聞く」「聞く」という「3つの門構え」を心掛けていました。私は子どもや保護者に「担任として信頼できますか」という無記名のアンケートをしました。これが「聞く」ことです。批判もあるため勇気が必要ですが、そうしなければ子ども自己流になってしまいます。次に、子どもの考えを十分に聞き、「こうしたが、どうでしょうか」と聞きました。こうして子どもと向き合いながら、経験を深め、教師としての成長を目指していったのです。

保護者との関係づくりでも、相手の気持ちを優先して考えることが大切です。教師は困った時だけ保護者へ電話をしがちですが、

子どもの良いことを伝えるほうが、ずっと信頼は深まるでしょう。減点評価ではなく、加点点評価の観点で「よさを見付ける」というかわり方を意識する方が人を成長させます。

管理職の先生が大切にしたいこと

壁を与えることに臆病にならず 張り合いのある集団活動を

先生方がより良い学級づくりを行うために、管理職の先生に心掛けていただきたいのは、学級づくりと同じように、一人ひとりの先生が「幸せ」を感じる学校をつくることです。多くの先生は十分に頑張っています。うまく出来て当たり前という姿勢ではなく、頑張りがいのある学校をつくってください。先生方を愛し、褒め、役に立っていること、そして必要とされていると感じさせることが大切です。

チームで取り組む体制づくりも、管理職の先生の役割です。学級経営を学校全体の取り組みとするためには、特別活動、とりわけ学級活動や、道徳などを学級づくりの中核に位置付けて、統一感をもって指導できるようにする必要があります。そして担任だけに任せず、望ましくない指導は指摘し合える体制を整えましょう。

管理職は、周囲に相談できる人があまりいませんから、孤独に強くなる必要があります。しかし、孤立してはいけません。先生方から

ボトムアップで意見を集め、校長先生が総意としてまとめるようにしましょう。

教師の育成を課題に感じている校長先生もいることでしょう。経験が豊富なベテラン教師は、時に自分のやり方に執着することもありますが、「あなたのために」という姿勢で意見することも必要です。そして次のチャンスを与えましょう。ここでも、温かさ(受容)と厳しさ(要求)を持ち合わせてください。

若手教師には多様なやり方を示し、本人が個性に合わせて選べるようにすると良いと思います。自己決定すると、内省が生じ、それが内発的動機につながります。自分でハードルを立て、自力で飛び越える力を付けることで、教師は自ら成長していきます。

今は、教師も保護者も、子どもに負荷が掛かる課題を与えることに少し臆病になっていると感じます。しかし、1人では解決できないような課題を通して、子どもは協力する大切さを学び、「自分で解決した」「自分たちで乗り越えた」という経験や自信は社会を生き抜く力になるでしょう。チームが協同する中では、意見の食い違いや衝突が必ず起こります。しかし、それを避けようとして壁を与えなければ、集団活動がひ弱になり、何も得られなくなりません。過剰なぶつかり合いにならぬよう、教師が十分に見取りながら、張り合いのある集団活動を通し、本物の人間関係を学べる学級を目指してほしいと願います。